

5. ビルマ文字版三蔵註釈文献

—ṭikā(復註)の一部と ganthantara(諸雑典籍)、nissaya(逐語訳)—

池田正隆

はじめに

大谷大学所蔵貝多羅葉研究班の一員としてビルマ文字写本と刊本の調査依頼を受け、筆者がミャンマーのヤンゴン(旧 Rangoon)にて購入し、1996年4月と翌1997年4月の2回、大谷大学図書館に納入した書籍は以下の合計52冊であった。

A. Ṭikā (復註書) 類

1. 『Vinayālaṅkāra-ṭikā (Paṭhamo-bhāgo)』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1984年刊本 432頁
2. 『Vinayālaṅkāra-ṭikā (Dutiyo-bhāgo)』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1984年刊本 446頁
3. 『Khuddasikkhā, Mūlasikkhā, Purānābhinavaṭikā-sahitā』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1962年刊本 522頁
4. 『Vinayavinicchaya-ṭikā (Paṭhamo-bhāgo)』
[=Vinayatthasārasandipani]
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1962年刊本 597頁
5. 『Vinayavinicchaya-ṭikā (Dutiyo-bhāgo), Uttaravinicchaya-ṭikā-sahitā』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1962年刊本 552頁

6. 『Abhidhammāvatāra-purāṇaṭīkā, Abhidhammāvatārā-abhinavaṭīkā [Paṭhamo-bhāgo]』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1962年刊本 384頁
7. 『Abhidhammāvatārā-abhinavaṭīkā [Dutiyo-bhāgo]』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1963年刊本 400頁
8. 『Maṇisāramañjūsā-ṭīkā [Paṭhamo-bhāgo]』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1963年刊本 512頁
9. 『Maṇisāramañjūsā-ṭīkā [Dutiyo-bhāgo]』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1964年刊本 610頁
10. 『Abhidhammatthasaṅgaho, Abhidhammatthavibhāvinī-ṭīkā』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1995年刊本 304頁 (1962年初版)

**B. Pāliganthantara-ṭīkā (三蔵以外のパーリ語による
諸雑典籍に対するティーカー) 類**

11. 『Subodhālaṅkāra-ṭīkā』 Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1964年刊本 399頁
12. 『Padarūpasiddhi-ṭīkā』 Padesāpiṭaka, Mandalay
1965年刊本 266頁
13. 『Abhidhānappadīpikā-ṭīkā』 Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1964年刊本 744頁
14. 『Namakkāra-ṭīkā』 Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1955年刊本 226頁

C. Bhāsāṭīkā (ビルマ語によるティーカー) 類

15. 『Rūpasiddhi-bhāsāṭīkā [Paṭhamo-bhāgo]』
Nayūbhāmāpiṭaka, Amarapura

1997年刊本（第3版） 615頁

16. 『Rūpasiddhi-bhāsāṭikā [Dutiyo-bhāgo]』

Nayūbhāmāpiṭaka, Amarapūra

1997年刊本（第3版） 602頁

D. Ganthantara (諸雜典籍) 類

1. 『Padarūpasiddhi』 Sāsanikappamukhaṭṭhāna, Yangon
1996年刊本（第10版 初版1964年） 540頁
2. 『Kaccañ-Saddakrī-pāṭh』 Sapyepiṭaka, Yangon
1984年刊本 394頁
3. 『Saddanītippakaraṇaṃ (Padamālā)』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1977年刊本 467頁
4. 『Saddanītippakaraṇaṃ (Dhāthumālā)』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1964年刊本 432頁
5. 『Saddaanītippakaraṇaṃ (Suttamālā)』
Buddhasāsanasamiti, Kamba-Aye, Yangon
1964年刊本 432頁
6. 『Moggallānabyākaraṇaṃ (=Māgadhasaddalakkaḥaṇa)』
Sāsanaye Ūciṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1981年刊本 292頁
7. 『Niruttidīpanī』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1970年刊本（初版） 765頁
8. 『Abhidhānappadīpikā-pāṭh, Abhidhānakkharāvalī, Subodhālaṅkāra-pāṭh, Vuttodaya-pāṭh (=Abhidhān-alaṅkā-chaṅ-pāṭh)』
Sāsanaye Ūciṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1995年刊本 256頁
9. 『Parittapālidaw, Parittaṭikā-pāṭh, Parittaṭikā-nissaya (3-kyam-twe)』
Sāsanaye Ūciṭhāna, Kamba Aye, Yangon

1990年刊本（初版1971年） 350頁

10. 『Sīrimaṅgalā-paritdaw』 Canmantarā-cāpe, Yangon

1990年刊本 376頁

E. Nissaya (逐語訳) 類

1. 『Mūlapaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1961年刊本 437頁

2. 『Majjhimpaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1962年刊本 424頁

3. 『Uparipaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』

Sāsanaye Ūcīḥāna, Kamba-Aye, Yangon

1978年刊本（初版1963年） 318頁

4. 『Sagāthāvaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Paṭhama-aup)』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1965年刊本 348頁

5. 『Nidānavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Dutiya-aup)』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1966年刊本 246頁

6. 『Khandhavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Tatiya-aup)』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1966年刊本 258頁

7. 『Salāyatanavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Catuttha-aup)』

Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon

1966年刊本 365頁

8. 『Aṅguttor-pālidaw-Nissaya (Paṭhama-twe)』

Buddhasāsanamiti, Kamba-Aye, Yangon

1995年刊本（第2版） 670頁

9. 『Aṅguttor-pālidaw-Nissaya (Dutiya-twe)』

Buddhasāsanamiti, Kamba-Aye, Yangon

1996年刊本 (第2版) 538頁

10. 『Paṭisambhidāmag-pālidaw-nissaya』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1961年刊本 376頁
11. 『Visuddhimag-nissayasac (Paṭhama-twe)』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1984年刊本 514頁
12. 『Visuddhimag-nissayasac (Dutiya-twe)』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1986年刊本 516頁
13. 『Visuddhimag-nissayasac (Tatiya-twe)』
Sāsanaye Ūcīṅṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1986年刊本 364頁
14. 『Visuddhimag-nissayasac (Catuttha-twe)』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1986年刊本 512頁
15. 『Visuddhimag-nissayasac (Pañcama-twe)』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1968年刊本 579頁
16. 『Abhidhammatthasaṅgaha (Tiṅgyo)-pāṭh-nissaya』
Sudhammawatī, Yangon
1994年刊本 336頁
17. 『Abhidhammāvatāra-aṭṭhakathā-nissayasac』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1971年刊本 719頁
18. 『Visuddhimagga-mahāṭikā-nissaya (Dutiya-twe)』
Sāsanaye Ūcīṭhāna, Kamba-Aye, Yangon
1978年刊本 (初版1967年) 578頁
19. 『Visuddhimagga-mahāṭikā-nissaya (Tatiya-twe)』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1968年刊本 664頁

20. 『Visuddhimagga-mahāṭīkā-nissaya (Catuttha-twe)』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1969年刊本 636頁
21. 『Saddanītipadamālā-nissaya (Paṭhama-twe)』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1970年刊本 564頁 (本文480頁)
22. 『Saddanītipadamālā-nissaya (Dutiya-twe)』
Buddhasāsanā-Aphwe, Kamba-Aye, Yangon
1970年刊本 466頁 (pp. 481~846)
23. 『Saddnītidhātumālā-nissaya (Paṭhama-twe)』
Sāsanaye Ucithāna, Kamba-Aye, Yangon
1976年刊本 532頁
24. 『Saddanītidhātumālā-nissaya (Dutiya-twe)』
Sāsanaye Ucithāna, Kamba-Aye, Yangon
1979年刊本 406頁
25. 『Maṇisāramañjūsaṭīkā-nissaya (Paṭhama-twe)』
Winshwecin, Yangon
1985年刊本 668頁
26. 『Maṇisāramañjūsaṭīkā-nissaya (Dutiya-twe)』
Winshwecin, Yangon
1986年刊本 664頁

以上 A. Ṭīkā 類	……………	10巻
B. Pāliganthantara-ṭīkā 類	……………	4巻
C. Bhāsāṭīkā 類	……………	2巻
D. Ganthantara 類	……………	10巻
E. Nissaya 類	……………	26巻

合 計 52巻

ここでは、これらの典籍につき、若干の解説を加え紹介するが、それに先立

ち、いわゆる「ビルマ第六結集版」なる典籍を類別して紹介し、その中における上記典籍の占める位置を明らかにしておきたい。

I. 典籍の位置

「第六結集版」について、1971年にビルマ政府仏教会が発行した出版カタログによって類別整理して見ると、以下のようになる。

三蔵 Tipiṭaka	……………	40巻；	(=40冊)
註釈書 Aṭṭhakathā	51巻；	他に	(1)学生用アッタカター ¹⁾ …… 4巻
			(2)レットン・アッタカター ²⁾ 5巻
		それらを加えた全アッタカター	→ 合計60巻
復註書 Ṭikā	26巻；	他に	(3)レットン・ティーカー …10巻
			(4)ガンタンタラ ³⁾ …………… 4巻
		それらを加えた全ティーカー	→ 合計40巻
従って三蔵40巻、および復註を含む全註訳書類100巻の総合計			→140巻
諸雑典籍 Ganthantara ³⁾	10巻；	〔文法書関係 (7巻)、その他 (3巻)〕	
従って第六結集版として、かつての政府仏教会 Buddhasāsana-Apwe			
出版局と、それを引き継いだ政府宗教省が1971年までに印刷出版した			
ビルマ文字によるパーリ語典籍の総合計			→150巻

また、同所が印刷出版したものとして、これらのパーリ語典籍以外に、上記結集版を底本にビルマ語も使って編纂した以下の2シリーズの典籍、その他がある。

ネイタヤ nissaya ⁴⁾ (逐語句訳)	23巻	
ビルマ語訳	30巻	合計→53巻

注：1) 「学生用 cāsaṅsā : kuin アッタカター」は学習用教科書として編まれた特別な aṭṭhakathā で、以下の4巻が出版されている。

- ①Pārājikakaṇḍa-aṭṭhakathā (Paṭhamo-bhāgo)
- ②Pārājikakaṇḍa-aṭṭhakathā (Dutiyo-bhāgo)
- ③Silakkhandhavagga-aṭṭhakathā
- ④Aṭṭhasālini-aṭṭhakathā

- 2) 「レッタン・アッタカター」、「レッタン・ティーカー」の「レッタン laksan」は、ビルマ語で「小指」を意味する。

「laksan-aṭṭhakathā」は、「略註書」あるいは「小綱要書」の存在であるが、紛らわしいので仮名書きのままとした。

「レッタン・アッタカター」としては、律蔵に関するもの

① Vinayavinicchaya, Uttaravinicchaya

② Vinigey 4-saun pāṭh

論蔵に関するもの

③ Mohavicchedanī-aṭṭhakathā

④ Abhidhammāvatārādicaturogantha (Abhidhammāvatāra, Nāmarūpapariccheda, Paramattha-vinicchaya, Saccasaṅkhepa)

⑤ Abhidhammatthasaṅgaha

の5巻がある

- 3) 「Ganthantara(ガンタンタラ)」は、文法書、文典、偈文の集成書物などの「諸雑典籍」を指す。

- 4) 「Nissaya」は、ビルマ語に入り「ネイタヤ」と発音された。「逐語訳」とか「逐語句訳」あるいは「逐語句釈」という訳語を与えられるが、パーリ語仏典の翻訳では、バガン時代末期以降ビルマ語による様々な形の典籍が多く編まれてきた。それがビルマ語散文に及ぼした影響も大きく、nissaya と題しながら、かなり変容した文体のものも見られる。

(John Okell “Nissaya Burmese—A Case of Foreign Grammar and Syntax—” 1965, etc. 参照)

さて、今回納入された典籍は、「ビルマ第六結集版」中の三蔵40巻、正規の註釈書類77巻 (Aṭṭhakathā 51, Ṭīkā 26) 以外のものである。つまり以下の5種類の典籍である。

- A. レッタン・アッタカターを開示したティーカー類→上表内の(3) 10巻
 B. パーリ・ガンタンタラ・ティーカー類————→上表内の(4) 4巻
 C. バーサーティーカー (bhāsāṭīkā) 類————→上表以外のもの 2巻
 なお、これはパーリ語と共にビルマ語も使用して編纂した註釈書である。
 D. ガンタンタラ類————→上表内の諸雑典籍 Ganthantara 10巻
 E. ネイタヤ類————→上表内の「ネイタヤ nissaya (逐語句訳)」23巻
 上表外の「ネイタヤ nissaya (逐語句訳)」3巻

いずれも、その時点までには大谷大学図書館に入っていなかったもので、特殊な *ṭikā* や *ganthantara* という点、またビルマ語による *nissaya* という点もあって、これまで日本では、研究の対象とされてこなかったものが殆どと言ってよいかもしれない。

すなわち、納入したものの中で次頁以降の「II. 入手典籍の成立と内容の概略」中でもふれるように、

〔A〕 *Ṭikā* 類の番号

1 から 5 までは、「レットン・アッタカターを開示した *Vinya* (律) のティーカー *ṭikā* (ビルマ語発音ではディーガー)」、

6 から 10 までは、「レットン・アッタカターを開示した *Abhidhamma* (論) のティーカー」、

〔B〕 *Pāliganthantara-ṭikā*

11 から 14 までは、パーリ語の文典やパーリ語による種々なる典籍について註釈をしたもので、ティーカー・クラスに入れられているものである。

〔C〕 *Bhāsaṭikā*

15 と 16 は、パーリ語も使うが、理解しやすくするためビルマ語も使って註釈したものであり、より *nissaya* に近いものとなっている。

〔D〕 *Ganthantara* 類の番号

1 から 7 までは、「*Ganthantara-Pāli* 典籍」でパーリ語文法に関するものあり、

8 から 10 までは、その他の「*Pāli-Ganthantara* 典籍」とされている。

〔E〕 *Nissaya* 類

1 から 15、17 から 24 までの 23 冊は第六結集版として *Kamba-Aye* から出版された典籍であり、16、25、26 の 3 冊は記載した通り、他の出版社によるものである。

なお、こうした類別は、上述したように、かつてビルマ政府仏教会 *Buddha-sāsanā-Apwe* が印刷出版した結集版とその関係典籍名を 1971 年にまとめた出版カタログの小冊子 (30+6 頁) 記載の類別に、沿ったものである。

また、大谷大学へ納入した書籍の中には1971年以降に出版されたもの（再版を含む）もあり、Kamba-Aye の *Buddhasāsanā-Apwe* には品切れで、他の書店で出版された典籍、一部はコピーによる典籍を購入して取り揃えた本があることをお断わりしておく。

II. 入手典籍の成立と内容の概略

入手できた典籍の原典を、いつ、誰が、どのような経過をたどり編んだのか、不明のものも少なからず存するようだが、諸伝本につたえられていることなどにより、ごく簡単に紹介を試みる。

[A] ティーカー (Ṭikā) 類

(a) レットン・アッタカターを開示した *Vinaya* (律) のティーカー

1. 『*Vinayālaṅkāra-ṭikā* (律莊嚴註) [*Paṭhamo-bhāgo*]』
2. 『*Vinayālaṅkāra-ṭikā* (律莊嚴註) [*Dutiyo-bhāgo*]』

スリランカの *Sāriputta* 長老 (12 cent.) 編『*Vinayaśāṅgha-aṭṭhakathā* (撰律)』の註釈書である。同長老自ら著した註釈『*Pālimuttakavinayavinicchaya-ṭikā*』もある(橘堂正弘著『スリランカのバリー語文献』p. 5, etc.) と伝えられているが、この『*Vinayālaṅkāra-ṭikā* (律莊嚴註)』は、ビルマの *Taunphīlā* にて、*Tipiṭakālaṅkāra Rājaguru* (称号) *Munindaghosa* 長老 [緬歴940~1013 (西暦1578~1651) 年] によって編述されたものである。

比丘の日常生活の実際に直面する問題で *Vinaya Piṭaka* には明らかにされていない諸点につき説明している。

『ビダガッドー・タマイン (*Piṭakadaw-Thamaing*)』(p. 124、以下同書を『P-T.』の略称で表記)、および『*Sāsanavaṃsappadipikā* 教史』(ビルマ文字原本 p. 119、以下同書を『Sās.』の略称で表記)でも「新ティーカー (*ṭikā-sac ; abhinavaṭikā*)」として紹介している。

3. 『*Khuddasikkhā, Mūlasikkhā, sahitā-ṭikā*
(小学・根本註とそのティーカー)』

- ① 「Khuddasikkhā」
- ② 「Khuddasikkhā-purānaṭīkā」
- ③ 「Khuddasikkhā-abhinavaṭīkā」 (「Sumaṅgalapasadanī-ṭīkā」)
- ④ 「Mūlasikkhā」
- ⑤ 「Mūlasikkhā-purānaṭīkā」
- ⑥ 「Mūlasikkhā-abhinavaṭīkā」 (「Vinayavimaticcheda-ṭīkā」)

「Khuddasikkhā (小学)」(pp. 1~56)は、スリランカの Dhammasiri によって著された Vinaya の綱要書と言われる。比丘が暗記しておくべきことを詩偈などにより示しており、ビルマでは、新参比丘必須の学習書「レットン・アッタカター」の一卷とされる。

その古ティーカー (pp. 59~234) は同じくスリランカのアヌラーダブラに住んだ Revata 長老により編まれた。さらに Saṅgarakkhita 長老により新ティーカー (pp. 237~440) が編まれ、それには「Sumaṅgalapasadanī-ṭīkā」という名が付けられている。

「Mūlasikkhā (根本註)」(pp. 443~456) は、Mahāsāmi なる名の長老による「レットン・アッタカター」の一卷で、「Khuddasikkhā」中のさらに重要なものを整理して示したものである。

その古ティーカーは、スリランカ・アヌラーダブラの Vimalasāra、新ティーカーは、ビルマの古都の一つであったピンヤの Samantagunasāgara が編み、「Vinayavimaticcheda-ṭīkā」と命名された。(同上『P.T.』p. 124 etc. 参照)

以上、二つのパーリ語偈文集の原本とその各々に新・古の復註も収録した典籍で、巻末に索引 (pp. 459~522) が付けられている。

なお、これらの中で「Khuddasikkhā」と「Mūlasikkhā」両原文は、既にローマナイズされて公刊されている。[『J. P. T. S.』 vol. 1, 1882, 3, 4; 1978年 (London) 版の Reprint, pp. 88~132 (1981)]

また、関連書として『Khuddasikkhādīpanī』、『Khuddasikkhāyojanā』などもある。

4. 『Vinayavinicchaya-ṭīkā (律決定註) [Paṭhamo-bhāgo]』
(= Vinayatthasārasandīpanī-ṭīkā)
5. 『「Vinayavinicchaya-ṭīkā [Dutiya-bhago]」、 「Uttaravinicchaya-ṭīkā」』

① 「Vinayavinicchaya-ṭikā (律決定註)」

② 「Uttaravinicchaya-ṭikā (上勝決定註)」

註釈家 Buddhadatta 長老による律に関する最初の綱要書『Vinayavinicchaya-aṭṭhakathā (律決定)』のティーカー (pp. 1~571、2巻目は pp. 1~392) であり、この版では編者を Bhadanta Sāriputtara 長老の弟子によるとする。ただし、『ビダガドー・タマイン』によれば、アヌラーダブラの Mahāupatissa 長老編としている。(『P.T.』 p. 125)

この書物では(序文 niddān 中に)、他に Vacissara 長老編とする説のあることもあげ、二長老の何れとも決められないとし、スリランカ、Pulatthi(ポロンナルワ市)の Jetavana に住し、『Sāratthadīpanīṭikā』を著わした Sāriputtara 長老の弟子の一人が編んだとしている。

第2巻 Dutiya-bhāgo の339頁までが『Vinayavinicchaya-ṭikā』で、続いて401頁から最後尾552頁までに『Uttaravinicchaya-ṭikā』が収められている。

「Uttaravinicchaya-ṭikā」の編者についても上記「Vinayavinicchaya-ṭikā」と同人とする。なお、巻末に索引 (pp. 531~552) が付けられている。

(b) レッタン・アッタカターを開示した **Abhidhamma** (論) のティーカー

6. 『Adhidhammāvatāra-ṭikā (入阿毘達磨論註) [Paṭhamo-bhāgo]』

7. 『Adhidhammāvatāra-ṭikā (入阿毘達磨論註) [Dutiyo-bhāgo]』

① 「Adhidhammāvatāra-purānaṭikā」

② 「Adhidhammāvatāra-abhinavaṭikā」 (=「Abhidhammatthavikāsinī」)

Buddhadatta 長老編「Abhidhammāvatāra-aṭṭhakathā (入阿毘達磨論)」(P. T. S. 1915, Buddhadatta's manuals) の ṭikā である。

表紙に示されているように、名前不詳の長老編「Abhidhammāvatāra-purānaṭikā」(pp. 1~137) と、Bhadanta Sumaṅgakaśāmi 長老編「Abhidhammāvatāra-abhinavaṭikā」の一部 (pp. 139~350) との合冊。

なお、『Piṭakadaw Thamaing』では、この古ティーカー purānaṭikā の編者を名前不詳としないで、アヌラーダブラ・マハーヴィハーラの Vācissama-hāsāmi 編とし、その点はセイロン所伝と一致している。(橘堂正弘著 p. 9 参照)

また、Sumangalasāmi 長老編の新ティーカー「Abhidhammāvatāra-abhinavaṭikā」は「Abhidhammatthavikāsinī」なる別名のあることも表紙に明示して

いる。

8. 『Maṇisāramañjūsa-ṭīkā [Pathamo-bhāgo] (摩尼宝篋註 第1巻)』

9. 『Maṇisāramañjūsa-ṭīkā [Dutiyo-bhāgo] (摩尼宝篋註 第2巻)』

この典籍編纂の事情は、『Sāsanavaṃsa-sappadīpikā』(原本 pp. 108~110) や『Sāsanālaṅkāra-cātam』(ビルマ語)でも詳細な説明があるためよく知られていることで、アーリヤウンタ Mahāriyavaṃsa 長老が『Abhidhammatthavibhāvanī』をエーゴン・ボンジー(和尚)に教授していただいたお礼として、要請を受けるままに比丘衆に、またその復註を講じつつまとめたものである。つまり『Abhidhammatthavibhāvanī-ṭīkā(阿毘達磨義論註)』を底本として編まれたものである。

『ビダガドー・タマイン』では、「緬歴804年ヤダナープーラ・シュエワ(インワ) 大国にて即位したトゥーパヨン仏塔施主ナラパティジー王即位第6年ヴィザヤープーラというピンヤ市の南方サカーエイン村出身のシン・マハーアーリヤウンタが編纂した」(p. 126)と述べる。すなわち、それによれば西暦1448年に編纂されたことになる。

10. 『Ṭīkāgyo-pāṭh (Abhidhammatthavibhāvanī-ṭīkā 阿毘達磨義論解明)』

① 「Abhidhammatthasaṅgaha (撰阿毘達磨義論)」

② 「Abhidhammatthavibhāvanī-ṭīkā (阿毘達磨義論解明)」

①は、Anuruddha 長老編の有名な論蔵修学のための入門書とされている『Abhidhammatthasaṅgaha(撰阿毘達磨義論)』(pp. 1~68)であり、②は、その註釈書 (pp. 69~278)。

「Abhidhammatthavibhāvanī-ṭīkā(阿毘達磨義論解明)」は、スリランカ・アヌラダプラ・マハーヴィハラー僧院のサーリプッタラーの弟子スマンガラマハーサーミ Sumaṅgaramahāsāmi (12 cent.) が編纂した。

古註釈書『Abhidhammatthasaṅgaha-purāṇaṭīkā』の存在も伝えられているため、これは『Abhidhammatthasaṅgaha』の『新ティーカー ṭīkāśac』とされている。

ビルマでは表題に出されているように、もっぱら『ディーガーゴ Ṭīkāgyo(「著名なティーカー」の意)』なる略称で通用しており、かつては見事に開示され

ていたので『ディーガー・フラ Ṭikā-hla (「見事なティーカー」の意)』と呼ばれていた。それがナラパチジー王の治世(西暦1441~67年)にマハーアリヤウンタ Mahā-Ariyavaṃsa が、サガイン市のブンニャ仏塔北方の師イエゴン・ポンジーの許で、この書を学ぶや3日目にしてすべての語法に通達したという。

このことが注目され、著名なティーカーとして『ディーガーゴ Ṭikāgyo』と呼ばれるようになり、それ以来現在もこの略称で通用している。(cf. 『P-T.』 p. 125, 『Sās.』 p. 109, 生野善應訳『ビルマ上座部仏教史』 p. 206)

なお、巻末に索引(pp. 281~304)が付いている。

[B] パーリガンタッタラ Pāliganthantara のティーカー

11. 『Subhodhālaṅkāra-ṭikā (善覚莊嚴註)』

西暦12世紀頃、サンガラッキタ・マハーサーミ Saṅgarakkhita Mahāsāmi により著わされたパーリ語の修辭学書『Subhodhālaṅkāra (善覚莊嚴)』の註。ただし、これはスリランカの長老による新・旧二つのティーカー、旧ティーカーは Vācissara 編で、新しいのはアヌラーダプラの名前不祥の長老編とされている(『P-T.』 p. 147)が、そのいずれでもない。スリランカ遊学の経験をもつビルマの長老 Siridhammakittiratanapajjota によって編まれたティーカーである。(cf. 『Piṭakat-sumpum-cātaṃ』 p. 269 ビルマ語本、以下『P-s.c.』の略称で表記する)

『Subhodhālaṅkāra (善覚莊嚴)』本典に関しては、片山一良駒沢大学教授のテキストおよび訳注による紹介がある。(『仏教研究』6、7号、国際仏教徒協会、1977、78年)

12. 『Padarūpasiddhi-ṭikā』

本典の『Padarūpasiddhi』は、ブッダピヤ Buddhapiya 師編纂の有名な文法書であり、その同じ長老が編んだティーカーである。[D] (a) の1. 『Padarūpasiddhi』の項参照。

13. 『Abhidhānappadīpikā-ṭikā (名義明燈註)』

① 「Abhidhānappadīpikā (名義明燈)」

② 「Abhidhānappadīpikā-ṭikā (名義明燈註)」

①は、スリランカ、モッガラナ Moggalāna 師によって編まれたパーリ語

語彙集『Abhidhānappadīpikā (名義明燈)』の原文で、3集・11品に分けて同義語、異義語などをあげ、合計1203偈にまとめたものである。タイ語訳もあることが紹介されている。(佐々木教悟著『インド・東南アジア仏教研究II上座部仏教』p. 258 参照)

②は、その註。ビルマのピンヤ王朝ティーハトゥーの治世(西暦1312~22年)にアトゥイウン(内務大臣)をつとめ、ヤドゥ詩などの諸著作(『Lokaniti』もこの人が編んだと伝承される)でもよく知られているサトゥリンガバラ Sirimahā-caturangabala によって編纂されたものであり、辞典的な役割を果たしたものである。ビルマでは『Māgadha-abhidhān-ṭikā』との略称で通っている。(cf. 『P-T.』 p. 145, 『P-s-c.』 p. 267)

14. 『Namakkāra-ṭikā (敬礼偈註)』

Buddhaghosa 編とされて「Namakkāra」の名でまとめられ、ブッダを礼拝し讃仰する際に使われてきた詩偈33偈の註。

ニョンヤン師 Ñaunyam-ācariya と呼ばれたレーヴァタ Revata 長老(緬歴1253~1316、西暦1873~1954年)が著した。1870年以降、植民地ビルマにも印刷術が普及し、「Namakkāra」のパーリ語偈文は、学校の教科書、冊子『セーソンドエ』などに採択されて一般の人々にも広まった。現在も仏前での礼拝時に唱えられている。

[C] パーサーティーカー Bhāsāṭikā 類

15. 『Rūpasiddhi-bhāsāṭikā (ルーパシッディ・パーリ語文典) [Paṭhamabhāgo]』

16. 『Rūpasiddhi-bhāsāṭikā (ルーパシッディ・パーリ語文典) [Dutiyo-bhāgo]』

底本の『Padarūpasiddhi』については、[D] の(a)1. で説明するが、その本典を著した同じブッダピア Buddhapiya 師編纂による『Padarūpasiddhi-ṭikā』が存在する。(『ビダガ・トンボン・サーダン』 p. 258、蔵書 No. 264-334、『P-T.』 p. 138 No. 380) しかし、これはそれとは別で、名声高かったアマラプラのマハーガンダヨン故長老ザナカビウンタ Janakāvivaṃsa (1899~1977) が著した刊本である。2巻におよぶ大著でビルマ語による詳細な注解が施されており、ビルマでは広く使用されている。

〔D〕 ガンタンタラ Ganthantara (文典および種々雑多な典籍) 関係

(a)パーリ語文典

1. 『Padarūpasiddhi (パダルーパシッディ)』

10世紀以前のブッダピア Bhadanta Buddhapiya 師による有名な四大文法書の一つ。「Mahārūpasiddhi」、あるいは単に「Rūpasiddhi」とも呼ばれる。

『ビダガッドー・タマイン』によれば、「セイロン島のアヌラダ都の南マハーヴィハーラ寺院に住み、ムーラティーカー、ウパーサカーランカーラ Upāsakālānkāra などの典籍を編んだアーナンダ長老に、メーダンカラという弟子がおり、そのまた弟子であったブッダピヤ Buddhapiya 師が編纂した」(p. 138)と伝える。1984年 Yangon の Piṭakadaw-pyanpwāye 出版所で印刷されたもの(初版、540頁)。

なお、上記のように〔C〕15, 16参照)アマラプラのマハーガンダヨン故 Janakāvivaṃsa 長老による注解『Rūpasiddhi-bhāsāṭīkā』(Vol. 1, 2, 1979, 1984年、いずれも第4版)の大著がある。

2. 『Kaccañ-Saddakri-pāṭh (カッチャーヤナ大文典)』

「Visuddhajanavilāsini (Apadāna-aṭṭhakathā)」、および「Ñāsa」、「Rūpasiddhi」などでは、釈尊の直弟子 Mahākaccāyana によって書かれたと記している。しかし、それは伝承を重んじたものであり、ビルマでも実際には5～7世紀頃のインドの学僧によるものと受け取られている。(cf. 「Moggallāna-nissaya」)

『ビダガッドー・タマイン』では、「ウッジェー一国のバラモン夫妻が勉学精進し、注解開示した。黄金に等しく見えたので「Kaccāna」と呼ばれた」云々(『P-T.』 p. 135)と記している。

なお、表紙にも示されている

「Dhātvetthamālā (語根の意味)	Dhātupaccaya vibhāgamālā (語根、縁語の区別)
Paccayamālā (縁語)	Āgamamālā (挿入句)
Cāsap-niyaṃ (連語法)	Samvaṇṇanāniyaṃ (註釈法)
Cāsap-akhyepyu-kyam:(連語根本書)	Vibhat-svey (格変化法)」

は、語法を覚えるため、それぞれパーリ語にビルマ語を結びつけた偈、短文に

付けられたタイトルで、誰が作ったか不明だが、昔から伝えられており、それも記載していることを示している。

3. 『Saddanītippakaraṇaṃ (声則論) [Padamālā (定義編)]』

仏歴1697(西暦1154)年、ビルマのパガンにおいて、アッカウンタ Aggavaṃsa により編まれた有名な独自の文法書。三蔵、アッタカター、ティーカーから、あらゆる例文を比較照合して編纂した、とまで言われている。

そのパーリ語彙の格変化を扱っている定義編である。

4. 『Saddanītippakaraṇaṃ (声則論) [Dhātumālā (解説編)]』

上と同じ編者による解説編である。なお、水野弘元「Saddanīti一書評」(『印度学仏教研究』第4巻2号)および、片山一良「Saddanītiにおける音声論」(『印度学仏教研究』第19巻2号)参照。

5. 『Saddanītippakaraṇaṃ (声則論) [Suttamālā (例文編)]』

上と同じ編者による例文編である。また、これら「Saddanīti」のティーカーやニッサヤも編まれている。

『Saddanīti-ṭīkā』は、ビルマの Paññāsāmi 長老(19世紀)によるもので、別名『Saddnīti-samvaṇṇanā』。Saddanīti-nissaya については、後述〔E〕の21, 22, 23, 24参照。

6. 『Moggallānabyākaraṇaṃ (モッガラーナ文法)] (=「Māgadhasaddalak-khana」)

Anurādhapura の Bhadanta Sirimoggallāna 長老(12世紀)の編纂による著名なパーリ語四大文典の一つ。その内容からカッチャーヤナ文法書よりは新しく、サッターニーティ文法書より少し古い、と言われている。表紙にも、セイロン島のアヌラーダプラ、Thūpārāma Mahāvihāra に住んでいたお方であると明記している。

パーリ語々彙集『Abhidhānappadīpikā (名義明燈)](この稿〔B〕13の①参照)を著した方と同人(仏歴1696年に即位したパラッカマブジャ王の治世に編まれた Nidāna etc. による)とするものがある一方で、著作場所や内容でも異なる

ところがあるため、同一人物かどうか分からない（マンドレーのアバヤアラーマ僧院故長老の『Moggallāna-nissaya』の序文）という主張もある。

7. 『Niruttidīpanī (訓釈燈明)』

Aggamahāpaṇḍita という称号をもつモンユア市の近代ビルマにおける傑出した故レディー長老 Ledi Sayadaw Shin Ṃāna (緬歴1208~1285、西暦1846~1923年)の著した文法書。モッガラーナ文法の内容に依拠してパーリ語文法を説いている。

(b)文法書以外のガンタンタラ

8. 『Abhidhān-alaṅkā-chaṅ-pāṭh (語彙・修辭・韻律書集)』

① 『Abhidhānappadīpikā-pāṭh (名義明燈)』

② 『Abhidhānakkharāvali (「名義明燈」索引)』

③ 『Subhodālaṅkāra-pāṭh (善覺莊嚴)』

④ 『Vuttodaya-pāṭh (韻律生起)』

①については、すでに〔B〕の13. 中で触れたように、モッガラーナ編のパーリ語における同義語や異義語などを数部門にわけ1203の偈文にしてまとめた語彙集 (pp. 1~151) である。

②は、その語彙集①の「索引」で、パーリ語のアルファベット順に単語を並べかえ、使用の便をはかったもの (pp. 153~205) である。

③についても〔B〕11. で触れたが、パーリ語に関する唯一の修辭学書『Subhodālaṅkāra』の本文367偈 (pp. 207~242) を掲げている。

④も③と同じ12世紀、スリランカのサンガラッキタ・マハーサーミ Saṅgharakkhita Mahāsāmi 師によって著された唯一のパーリ語韻律学書 (pp. 243~253) で、作詩のために編まれたもの。

以上の4編が、上記『Abhidhān-alaṅkā-chaṅ-pāṭh (語彙・修辭・韻律書集)』という題名の典籍中に収められている。

9. 『Parittapālidaw, Parittatikā-pāṭh, Parittaṭikā-nissaya (3-kyam: tve)』

① 「Paritta-pālidaw」(護呪)

② 「Paritta-ṭikā-pāṭh」(護呪註)

③ 「Paritta-ṭikā-nissaya (護呪註逐語訳)

①は、第六回仏典結集会において承認された護呪、すなわち「パリッジー(大護呪)」11経 (pp. 2~18) をとりあげている。

② (pp. 21~113) は、本文結語に「テージディーパ (Ashin Tejodīpa) 長老により、アノッペルン王の治世、仏歴2153年・緬歴971 (西暦1609) 年に編まれた」と記されている。(本文結語 p. 113)

③ (pp. 115~339) は、ビルマ語への逐語訳であるが、編者不祥の長老によるものという。

10. 『Sīrimangalāparidaw (吉祥護呪経)』

ビルマで伝承されてきた31種のパリッタ (護呪) を収めている。1948年ヘンザダ町のウー・ミヤをはじめ当時の在家仏教界の要人が集まって興した Thirimangalā Paritdaw Apwe (吉祥護呪口誦集會) による仏教復興運動のために編まれたものと同じ内容である。[詳しくは拙論「ビルマの読誦用護呪經典集2種」(鹿児島大学史録第5号1972年) 参照]

Maṅgalasutta をはじめ Ratanasutta などのパリッジー11経以外に、Mahāsamayautta, Chadisāpālasutta, Uppātasanti, Dhammapada, Brahmajālasutta などまで収録されている。また、Uppātasanti のビルマ語訳、Abhinhasutta, Anattalakkhanasutta, Parimittajālasutta, Dhāranaparitta の各ネイタヤ nissaa も付けられている。

[E] ニッサヤ Nissaya (ビルマ語による逐語訳・逐語句訳) 関係

(a)三蔵のニッサヤ (ネイタヤ)

Majjhima Nikāya Nissaya (中部經典逐語訳)

1. 『Mūlapaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』
2. 『Majjhimpaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』
3. 『Uparipaṇṇāsa-pālidaw-nissaya』

Saṃyutta Nikāya Nissaya (相応部逐語訳)

4. 『Sagāthavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Paṭhamatwe)』

5. 『Nidānavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Dutiyatwe)』
6. 『Khadavaggasaṃyut-pālidaw-nissaya (Tatīyatwe)』
7. 『Sālāyatanasaṃyut-pālidaw-nissaya (Catutthatwe)』

Aṅguttara Nikāya Nissaya (増支部逐語訳)

8. 『Aṅgutto-pālidaw-nissaya (Paṭhamatwe)』
9. 『Aṅgutto-pālidaw-nissaya (Dutiyatwe)』

Khuddaka Nikāya Nissaya (小部經典逐語訳)

10. 『Paṭisambhidāmagga-pālidaw-nissaya』

以上10巻(冊)は、それぞれすべて第六回仏典結集版を底本にして、ビルマ語によりパーリ語の単語、あるいは語句ごとに意味をとらえて逐語訳し、「パーリ語本文語句・そのビルマ語訳、パーリ語本文の語句・そのビルマ語訳」という順序で交互に並べていったものである。

こうしてパーリ語經典を一字一句残さず理解して覚えていくという伝統は、ビルマでは上座部系仏教を受用後暫くしてパガン時代末期、1300年代初頭頃から始められ、連綿と続いて莫大な数のネイタヤ Nissaya が作られた。〔ターラー・ヤシ(多羅葉椰子)の葉に刻記されて保存されたが、厳しい自然風土などのため長年月の管理は難しく、失われてしまったものが多い。〕

その伝統、慣習は現在も受け継がれて残り、ビルマ語訳すなわちパーリ語を挿しはさまずに最後まで通して全訳する方法を採らずに、こうしたネイタヤ形式の逐語訳典籍が著作され続けている。

(b)アッタカターのニッサヤ

11. 『Visuddhimag-nissayasac (Paṭhamatwe) (清浄道論新逐語訳 第一巻)』
12. 『Visuddhimag-nissayasac (Dutiyatwe) (清浄道論新逐語訳 第二巻)』
13. 『Visuddhimag-nissayasac (Tatīyatwe) (清浄道論新逐語訳 第三巻)』
14. 『Visuddhimag-nissayasac (Catutthatwe) (清浄道論新逐語訳 第四巻)』
15. 『Visuddhimag-nissayasac (Pañcamatwe) (清浄道論新逐語訳 第五巻)』

以上5巻は、アッタカターとして扱われるあまりにも有名な Buddhaghosa 編『Visuddhimagga (清浄道論)』の新ニッサヤである。サガインのシュエゼデ

ィ・タータナーイェタ寺院の故長老 Aggamahāpaṇḍita Shwezedī Sayadaw トウンダヤ Sundara により編纂され、近年1984年から1986年に出版されたものである。

ビルマでは古くは緬歴1138（西暦1776）年アヴァ都のガシグー王の治世に、ソントー Chumthā 長老ナンダマーラー Nandamālā が『Visuddhimag-atthakathā-nissaya』を著したことを伝えている。（『P-T.』 p. 172）

(c)レットタン・アッタカター [Abhidhamma の関係] のニッサヤ

16. 『Abhidhammatthasaṅgaha (Tiṅgyo)-pāṭh-nissaya (撰阿毘達磨義論)』

① 『Abhidhammatthasaṅgaha (Tiṅgyo)-pāṭh (撰阿毘達磨義論)』

② 『Abhidhammatthasaṅgaha (Tiṅgyo)-pāṭh-nissaya (撰阿毘達磨義論逐語訳)』

『アビダンマサンガハ』①は、すでに触れたように、スリランカのアヌルッダ師があらわした論蔵への入門書である。ビルマではもっぱら『ティンジョ』と呼ばれ、仏教教義学習者がまず最初に手にしなければならない典籍である。

これには多数のビルマ僧によるネイタヤ nissaya が編まれており、『ビダガドー・タマイン』に採り上げられている（16世紀中葉から19世紀中葉までの間に著述された）ものみでも、22種ある。散逸してしまったもの、所在不明のものも多いようだが、残存している典籍の中で刊本となり著名なのが、このパーガヤ (Pa-ṭhama Bāgaya) 長老（18世紀初め頃 Bodawpaya 王治世の人）編②なのである。

17. 『Abhidhammāvātāra-aṭṭhakathā-nissayasac (入阿毘達磨論註新逐語訳)』

ブッタダッタ長老によって著された『アビダンマーヴァターラ・アッタカター』に対する、ビルマ語による逐語訳形式のネイタヤである。これには従来、新古2つの nissaya が挙げられており、古い方は、Alaungpayā 王（西暦1752～60）の治世に著名であった Ñāna 長老によるものであった。

ここに採り上げられているのは、それだけでなく新ネイタヤであり、Bagyidaw 王（1819～37）の治世にサンガ主を務めたサリン Salin 長老の編纂したものである。

(d)ティーカーのニッサヤ

18. 『Visuddhimaggamahāṭīkā-nissaya (清浄道論大復註逐語訳) (Dutiyatwe)』

(=Paramatthamañjusā-ṭikā 以下同じ)

19. 『Visuddhimaggamahāṭikā-nissaya (清浄道論大復註逐語訳) (Tatīyatwe)』
 20. 『Visuddhimaggamahāṭikā-nissaya (清浄道論大復註逐語訳) (Catutthātwe)』

『Paramattamañjusā-ṭikā』あるいは『Mahā-ṭikā』とも呼称された『ヴィスディマッタガ (清浄道論)』のティーカーは、スリランカのアスラダ都西バダラッティッタ僧院に住したダンマパーラ Dhammapāla 編纂と伝承される。

そのニッサヤについて、『ビダガドー・タマイン』は「緬歴1221 (西暦1859) 年マンダレーヤダナボン都宮を建立したマハーローカマーラジン仏塔施主・ミンドン王の治世に、Siripavara-mahārājindāhipati-ratanadevī なる称号徽章を授けられた後宮の正妃の報道官で執事長、内務大臣でありサガイン管区知事、マインカインのミョウザー (領主)、経蔵監督官、精鋭御座船監督官でもあるミンデー・マハーシリゼーヤトウ Mahāsiriṣeyatū と翻訳官ネミョーダンマチョウドウ Nemyodhammakyawtū が編纂した。貝葉が2包み存在する」と記している。(『P-T.』 p. 178)

しかし、それとは異なるこの刊本は、カマタン禪定の指導においても世界的に著名な故マハーシー Mahāsi 長老 (1904~1982) の手によるもので、1978年 Yangon の Kamba-Aye, Sāsanāye Ucīthāna (宗教省) にて印刷出版された。

(e)ガントタラ類のニッサヤ

21. 『Saddanītipadamālā-nissaya (音則論定義編逐語訳) (Paṭhamatwe)』
 22. 『Saddanītipadamālā-nissaya (音則論定義編逐語訳) (Dutiyatwe)』
 23. 『Saddanītidhātumālā-nissaya (音則論定義編逐語訳) (Paṭhamatwe)』
 24. 『Saddanītidhātumālā-nissaya (音則論定義編逐語訳) (Dutiyatwe)』

『サツダニーティ (音則論)』の原本については、すでに [B] (a) の3. 4. で説明した。その nissaya は、『ビダガドー・タマイン』(p. 198) によればバジードー王の治世 (西暦1819~37) に padamālā, dhātumālā, suttamālā とともにヤウンガン長老ウー・ブツ (Ñaunkan Sayadaw U Put) が編纂したとしている。

上記の版は、いずれも Sayadaw U Budh 編としていて、padamālā の2冊は1970年、dhātumālā は、第1巻が1976年、第2巻が1979年に出版されている。

なお、デンマークの Lund から Helmer Smith 編 『SADDANITI La

Grammaire Palied'Aggavaṃsa』が、1928年から1929、1930年と継続して出され、1949、1954、1966年で索引も完結している。

25. 『Maṇisāramañjūsā-ṭīkā-nissayasac (Paṭhamatwe) (摩尼宝篋註新逐語訳 第1巻)』
26. 『Maṇisāramañjūsā-ṭīkā-nissayasac (Dutiyatwe) (摩尼宝篋註新逐語訳 第2巻)』

マハーアーリアウンタ長老編『Maṇisāramañjūsā-ṭīkā (摩尼宝篋註)』については、すでに記した。そのネイタヤ nissaya は、タラワッディ王の治世、西暦1840年頃 Khingyīpu 長老により編纂されていたことが伝えられているが、未完結だったようである。

入手されたこの新ネイタヤは、近年ヤンゴンの Devasāgarasimkun 僧院のパーリ語大学総長ウー・パンディッサ Sayadaw Ū Paṇḍicca が編纂し、1985～86年に Winshwecin 出版店から刊行されたものである。

[平成10年春稿了]